

## 主 題：私の信条 6

## 聖書箇所：使徒信条

ごいっしょにみことばを見ていきましょう。私たちは「使徒信条」について学んでいます。教会に集う人たちが「使徒信条」を口にすることがあるかと思えます。それでいながら私たちはその意味がよく分かっていない可能性があるのです。私たちはこの「使徒信条」というすばらしい信仰告白に記されている大切な真理をしっかりと知ることによって、「どんなときにも私はこれを信じる」と告白する信仰者になりたいと願って、この信条の学びを始めたのです。

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来りて、生ける者と死にたる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえいのちを信ず。 アーメン

すでに私たちは、父なる神について、子なる神について、そして、聖霊なる神について学んで来ました。前回は「聖なる公同の教会」についても学びました。私たちが覚えなければならないことは、こうして地域の教会にあっても、そして、世界に一つしかないイエス・キリストを信じる者たちが属する見えない公同の教会にあっても、主は「主に従うこと」、また、「聖さ」を求めておられるということです。なぜ、そうなのか？それは教会の所有者は「主」だからです。だから、教会は主である神のみこころに従って働きを為すのです。ですから、教会とは主イエスのためにすべてのことをする集まりだと見て来ました。主イエス・キリストの栄光を現すことだけを願いながら、権威ある聖書の教えに従う集まりだと。

今日、私たちは「我は聖徒の交わりを信ず」というところから、願わくは、終わりまで学んでいくことができればと思っています。

## E. 聖徒の交わり : 我は聖徒の交わりを信ず

確かに、みことばは主イエス・キリストを信じるひとり一人は、主の恵みによって「神の子」とされること、また、「神の家族」とされることを教えています。ヨハネ1：12には「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあります。また、パウロはガラテヤ3：26で「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」と言っています。ヨハネはIヨハネ3：1で「私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです——…」と言い、また、パウロはエペソ2：19にも「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。」と記しています。

イエス・キリストを信じたすべての者たちは神の家族であると言います。この世界に一つしかないすべてのクリスチャンが属する公同の教会において、私たちはみな神の家族であると。そこにはあらゆる人種、国籍、年齢の人たち、また、様々な職種、身分の人たちが属しています。そして、神の家族のメンバーはすべて神の前に平等です。神の栄光のために助け合う者たちです。また同時に、私たちはともに永遠を過ごす家族なのだということを忘れてはなりません。

確かに、この地上にあって様々な教会が存在し、そして、教理的な違いがあります。私たちはその中において、自らの信念に基づいて行動します。なぜなら、それが主に対する各信仰者の責任だからです。その結果、教理などの違いから協力して働けないことが生じて来ます。しかし、だからと言って、彼らは敵でも悪でもありません。教理的相違については自らの教理の正当性を証明することや、また、相違する教理の過ちを語ることはできます。それによって聖書が教える真理が何かを考えて、その教えに忠実であるために、私たちはそれについて考えることができます。しかし、同じ考えを持っていないからと言って彼らをさばいたり、自分たちと同じ信仰をもっていない人たち、同じことを信じていない人たちを悪であるとか敵であるかのように扱うことは主の前に間違っていることを私たちは知っています。それが存在しても彼らへの愛を失ってはならないのです。なぜなら、私たちは神の家族であり、永遠とともに過ごす関係だからです。

しかし、このことはあくまで神の家族に属する本当の救いに与っている者たちに対してであって、偽りの教師たちや教会の中に悪を持ち込むような働き人たちに対してではないことはお分かりですね。私

私たちはそのような人々の間違いを非難して人々が惑わされないように警告を発していくことが必要です。ですから、まず、この使徒信条を見て「聖徒の交わり」と言ったときに、あくまでこれは、イエス・キリストを信じる者たちのことであって、どのような兄弟姉妹たちが交わりを保っているのか、どのような関係を保つべきかを私たちはこの「使徒信条」から教えられます。

ですから、こういうことです。イエス・キリストを信じて救いに与ったならみな神の家族です。私たちは尊敬をもって愛をもって接することが必要です。特に私たちは、クリスチャンが集まるなら、見て来たように「聖徒の交わり」という以上、神が喜ばれる交わりを持つとすることが必要です。このことはどちらかと言うと、地域の教会、この私たちのような教会において必要なことです。クリスチャンが集まったときにその時間がこの世の話で終わってしまったり、それぞれの信仰を高めることにならないなら、それは主が求めておられる交わりではないということです。ですから、今、皆さんに三つのことを覚えていただきたいのです。私たちが交わりとときにこういうことをしっかり覚えてこういう目的をもって兄弟姉妹たちと交わりをもつべきであると。

**☆交わりの目的 : 主に歩みの模範に倣う**

### 1. 互いの信仰の成長を助け合う

パウロはローマ14:19で「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。」と語っています。また、同じようにローマ15:2でも「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」と記しています。つまり、パウロが言っていることは、私たちが集まるとき、お互いに助け合って信仰の成長を図っていくように、それが交わりの目的だということです。

### 2. 互いの重荷を負い合う

ガラテヤ6:2に「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」と記されています。ここで使われている「重荷」ということばは「対処が大変難しく手に負えない困難、問題」を指しています。私たちの日々の生活ではいろいろな重荷を経験します。そのときに、それを「負い合いなさい」と言うのです。少なくとも私たちは、愛する兄弟姉妹と連絡を取ったり、また、祈り合うことができます。こうして互いの重荷を負い合っていくようにと言うのです。

パウロはIテサロニケ5:11でも「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」と語っています。私たちは励まし合うことができます。そして、みことばによってどのようにその重荷に向き合うべきか、そのことを知ることができます。みことばが教えているのは、この後も見ていきますが、自分の重荷をだれかに負わせるということではありません。自分がだれかの重荷を負うのです。私たちのフォーカスは自分ではなく私たちの周りの兄弟姉妹たちです。彼らの重荷を負おうとするのです。こうしてお互いが励まし合って主に従い続けていくようにと教えます。

### 3. 互いに仕え合う

1) **その重要さ** : ペテロはその大切さについてこのように言います。Iペテロ4:10「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」と。何のためにそのことをするのか？互いの成長のためにです。ペテロが言うことは、ひとり一人イエス・キリストを信じた者たちは、神から救いとともにより多くの賜物をいただく、だから、その賜物を用いて互いに仕え合っていくべきということ。先ほども見たように、私たちは人々のために何ができるかを考えて行動するのです。兄弟姉妹たちを励まし、彼らが信仰にあって成長するように、そのことを願ってすべてのことを行うようにと言うのです。

ですから、パウロもIコリント12:7で「しかし、みなさんの益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」と語っています。御霊の賜物が与えられているのはあなたの益のためではなく、周りの人たちの益のためだということです。ですから、みことばが私たちに教えていることは、私たちは神を愛し隣人を愛して生きていくことです。彼らのために何ができるかを考えて生きていくのです。そして、私たちクリスチャンは彼らの信仰が成長することを願いながら、そのために何ができるかを考えて行動していくようにと教えています。

2) **その動機** : 但し、その動機についても聖書は教えています。パウロはガラテヤ5:13でこのように言います。「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」と。ここで使われている、

・「仕えなさい」 = 奴隷としての義務を果たすようにという意味です。奴隷として仕えていくように。ですから、私たちは愛する兄弟姉妹たちに対して、あたかも彼らの奴隷であるかのようにして仕えていきなさいと言われているのです。

・「愛をもって」 : しかも、このように奴隷として仕えるために必要なのは「愛」という動機だということです。この箇所にも記されています。この「愛」はアガペーの愛が使われています。神が与えてくだ

さった愛をもって互いに仕え合っていきなさいということです。ですから、このこと「をしなければならぬから」ではなく、これを喜んでほしいという態度です。

・「互いに」：その愛をもって、しかも、「互いに」と言います。「あなたは私の奴隷なんだ」という態度ではなく、「私があなたの奴隷です」という態度をもってそれぞれの信仰者たちが兄弟姉妹たちに仕えていくようにと教えるのです。

これはイエスが教えてくださった教えそのものでもあるのです。ヨハネ13：34で「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と言われた通りです。愛する兄弟姉妹たちが互いに愛するように、互いに仕えていこうとする、愛する兄弟姉妹たちの信仰が成長することを願いながらその働きを為していこうとするのです。そして、その働きを継続しなさいと言います。

確かに「人々に仕える」ことは、言うことは簡単でも実際には難しいことは良く分かっています。そこで、パウロがイエスの模範を描きながらこんなことを言いました。ピリピ2：3-5「:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」と。ですから、今、私たちが見て来たことは主ご自身が実践しておられたことです。ですから、それをもってパウロは兄弟姉妹がともに集まるときに、私たちは何を目的に集まるのか？愛する兄弟が、愛する姉妹が成長することを願いながら交わりをもつことです。「私は聖徒の交わりを信じる」と。クリスチャンたちがこのように主に喜ばれる交わりをもって、益々神を愛する者、神に従う者と成長していく、そのために交わりを持ちなさいということです。

#### F. 我は罪の赦しを信ず

その次に信条が記すことは「我は罪の赦しを信ず」です。クリスチャンであるなら当然、「私の罪は赦された」と確信しているはずですが、でも実際には、ときにクリスチャンが自分の救いに疑問をもっています。「果たして私は本当に救われているのかどうか？」と。そのような質問をいただくことがあります。もし皆さん、そのように疑問をもっているならどうすればいいのかわかりますね。聖書から解決を得ることで、救いの疑問に終止符を打つためには「聖書に立つこと」だけが必要です。

そのことを見ていきますが、その前に、では、なぜ私たちは自分の救いに対して疑問を抱くのか？本当に救われているのかどうか？と。次の二つの理由がその原因だと考えられます。

(1) 信仰が感情に頼っている：つまり、感情に頼った信仰は、感情が揺れ動くように不安定で浮き沈みがあります。すべてがうまくいっているときは救われていると思うけれど、逆に、罪に敗北し、また、敗北を繰り返しているときは救われていないと思ってしまう…。多くの人はそのように経験されているでしょう。しかし一番の問題は、このような状態に留まり続けるという選択をしているということです。最初に話したように、もしそれが問題なら、それがあなたの不安であるなら、しっかりみことばに戻ってみことばから確信を得ることで、なぜ、そのような状態に留まり続けるのか？

(2) 信仰が経験に頼っている：つまり、多くの人たちが「私は集会においてそこで招き応じて手を挙げた」「招き応じて前に出た」と、そのことを自分の信仰の根拠にしているのです。だから、「あなたは救われていますか？」と問われたときに、自分が過去に行ったある行為を思い出して、すなわち、手を挙げたとか前に出たとか、だれかといっしょに祈ったなど、その行為を思い出して「はい」と答えるのです。たとえ自分がその行為を行った後、これまでと同じように罪の中を歩み続けていたとしても、救われていますか？と問われたなら「はい」と答えます。なぜなら、過去のある行為に救いの確信を置いているからです。

救いにおいて大切なことは、あなたが「救われている」と思い込むことではなくて、神が「あなたは救われている」と言ってくれるかどうかです。神の前に立ったときに神が「あなたは救いに与っていない」と、もし、そのようなことがあったならその後悔は取り返しがつきません。ですから、神が「あなたは救われている」と言ってくれるのか、ただ、あなたがそのように思い込んでいるだけなのか…。私たちは聖書の教えを正しく見る必要があります。

聖書が教える救いは「その人を新しく造り変えるもの、新しい心が与えられること」です。ゆえに、新しい歩みという救いの証拠が伴うものです。ですから、私たちは自分の信仰を吟味することが必要です。なぜなら、「救われている」と信じ込んでいながら救われていなかった人たちが、これまでもそして今も数多く存在しているからです。

では、この「救い」という大切なことにまだ疑問を持っている方がおられるなら、それに終止符を打つために、繰り返しますが、「聖書に立つこと」です。具体的に言うなら、聖書が教える真理を信じることです。私たちはマタイの福音書16：16のみことばを何度も見て来ました。ペテロが告白をします。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と。これはペテロだけでなく、そこにいた弟子たちの告

白でもあったということ私達はもうすでに学びました。この告白が何を明らかにしているのか？

(1) **主イエスについての真理を認める** : イエスとはだれなのかを明らかにしているのです。イエスは約束の救世主であり、人となられた神であり、真の神であり、そして、いのちの源である神であると。「約束の救世主」、あなたはキリストです。「人となられた神」、あなたは御子です。「真の神」、あなたは神です。そして、「いのちの源である神」、いのちを与え永遠に生きておられるお方、生ける神です。ですから、イエスについての真理を心から認めることです。そして、

(2) **主イエスを信じて従う決心をすること** : これまで信じることなく逆らって来たあなたの罪を悔い改めて、あなたの救い主として、また、神であり主であるイエスを信じてこの方に従っていかうとするのです。

☆その結果 : **救われた者に見る「救われた印」とは？**

さて、その救いに与った者には必ず証拠が伴います。自分の信仰が本物かどうか？本当に私は救われているのかどうかを知ることが出来ます。ヨハネの手紙第一を見ていきます。5 : 13に「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」と書かれています。ヨハネはこの手紙を記した理由をこのように明らかにしています。それは「イエスを信じた者たちが永遠のいのちをいただいていることを確信させるため」、それが目的だと言うのです。ということは、この手紙の中には救われた者の「印」が記されているのです。救われた者たちはこのような特徴をもっていると言います。それらのうちの九つを今から見ていきます。

### 1. やみの中を歩み続けたい 1 : 6

1 : 6「もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。」、つまり、救われていると言いながら罪の中を継続して習慣的に歩み続けているのです。そのことは3 : 6、8、9にも書かれています。「:6 だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちを歩みません。罪のうちを歩む者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。」「:8 罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。:9 だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。」、

ですから、やみの中を歩んでいる、罪の中を歩み続けている、同じことです。これらの箇所が教えていることはみな同じことで、イエス・キリストを信じた者たちは生き方が変わります。これまでは罪を愛して罪の中を何の問題もなく生きていましたが、イエスを信じた後、そのように生きていくことは難しくなるし、そのように生きたくないとなります。でも、これは「救われた者は罪を犯さない」ということではありません。なぜなら、1 : 6の後、1 : 8 - 10にこのように書かれているからです。「:8 もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。:9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。:10 もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」と。つまり、イエスを信じて悲しいことに私たちは罪を犯してしまうということです。そのことはあなた自身が分かっているし神もそのことをご存じです。

では、何が違うのでしょうか？今までは罪を犯してもそれを神の前に告白しようなどとは思わなかった、でも、イエスを信じた者たちは罪を犯したならそれを神の前に告白して生きていこうとします。ですから、1 : 9に「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、…」とこのことを実践するのです。罪を愛して罪の中を喜んで生きていた私たちはもうそのように歩むことができなくなるのです。まず、これが一つ目の印です。

\***救われていない者の特徴** : やみの中を歩んでいる 1 : 6

### 2. 神の命令を守る 2 : 3

2 : 3「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。」と、二つ目の印は「神の命令を守る」ということです。5章に飛んで5 : 2にも「私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。」とあります。ここで使われている「守る」ということばは「従う、行う」ということです。5 : 3には「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」と同じことばが使われています。

ですから、救いに与った者の特徴は、神の命令を守っていかう、それに従っていかう、行っていかうと、そのような思いを持って歩んでいることです。

\***救われていない者の特徴** : 神の命令を守らない 2 : 4「神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」、神の命令を全く無視してそれに従お

うとしないのは救いに与っていない人の特徴です。ですから、救いに与った人は神の命令に従っていきたく、そのような願いをもっていながらも失敗の連続ですが、少なくとも、私の心の中には神の命令に従っていきたくという思いがあります。それが救われている証拠です。

### 3. みことばを守る 2 : 5

2 : 5 「しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。」と、三つ目の印は「みことばを守る」ということです。みことばを聞いてもそれに従っていかうとしないなら、その救いを考えてみなければなりません。というのは、新しく生まれ変わった者はみことばを守り従っていかうとするからです。

**\*救われていない者の特徴** : みことばを守らない

### 4. 兄弟を愛する 2 : 10、3 : 10

2 : 10 「兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。」と、四つ目の印は「兄弟を愛する」ということです。

**\*救われていない者の特徴** : 兄弟を憎んでいる 2 : 9 「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。」、3 : 10にも「そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」と書かれています。ですから、イエスを信じて救いに与っている者は兄弟たちを愛するが、兄弟姉妹たちを愛さない、憎んでいる者はそうではないと言います。

### 5. 御父を愛する 2 : 15

2 : 15 「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」、4 : 21にも「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」とあります。ですから、五つ目の特徴は「父なる神を愛する」ということです。

**\*救われていない者の特徴** : 神ではなくこの世を愛する 2 : 15

### 6. 義を行う 2 : 29

2 : 29 「もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義を行う者がみな神から生まれたこともわかるはずです。」、「義を行う者がみな神から生まれた」と、救われた者たちは義を行うということです。3 : 7にも「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです。」、ですから、神の前に正しいこと、神がお喜びになること、神の前に聖いこと、そのようなことを私たちは行っていかうとするのです。このような新しい思いをもって生きるのです。

**\*救われていない者の特徴** : 義を行わない、義を継続して行わない 3 : 10 「そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」、彼らは「悪魔の子ども」だと言います。

### 7. キリストのうちに留まる 3 : 6

3 : 6 「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。」、つまり、救いに与っている者は信仰から離れないということです。

**\*救われていない者の特徴** : キリストのうちに留まらない 2 : 19 に悲しいことが記されています。「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。」と。つまり、兄弟姉妹と思っていた人がその交わりから出て行った、主を捨てて信仰を捨ててこの世に戻ってしまったと。そういう人たちは元々救われていなかったのです。救いに与ったなら救いを失うことはありません。でも、最初から見ているように、救われていると思って皆もそのように見ていたけれど、実際は救われていなかったのです。

教会が社交場のようになっている。教会に集う目的がそこにいる人たちとの楽しい歓談の時であるなら、そのことを吟味しなければなりません。ただ、楽しいからそこに集まるというのでは、他に楽しいことができるとその方に移っていきます。ですから、キリストのうちに留まり続ける者たち、この信仰に留まり続ける者たち、それが救いに与っている特徴です。

### 8. 互いに愛し合う 4 : 7

4 : 7 「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」、4 : 19にも「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださいましたからです。」とある通りです。だから、クリスチャンであるなら「互いに愛し合う」のです。

**\*救われていない者の特徴** : 互いに愛し合わない

### 9. イエスがキリストであると信じる 5 : 1

5 : 1 をご覧ください。「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生

んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」、5：5にも「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」と、ですから、イエスを神と信じる者たちです。

### \*救われていない者の特徴： イエスが神であると信じない

こうして今、ヨハネの手紙から九つのことを見て来ました。本当に救われている人たちは、自分が救われていることをどのようにして知ることができるのか？これらがその特徴だとヨハネは教えます。やみの中を、つまり、罪の中を救われる前と同じように平気で継続して歩み続けたい。罪を犯したとき私たちは神から責められてその罪を神の前に告白します。神の命令を守ろうとします。失敗続きでもそれを守っていこうとします。また、みことばを守ってその教えに従っていこうとします。兄弟を愛します。その愛は残念ながら不完全でも兄弟のために祈り、兄弟を愛するように、そのことも神に求めています。御父を愛します。ゆえに、私たちはその方が喜ばれる義を行っていこうとします。イエスを信じた信仰を捨てようとはしないし、兄弟姉妹が互いに愛し合います。イエスがキリストであることを信じるし、そして、この方を否定することはしません。

ですから、もし「私の信仰が本物かどうか分からない」という疑問を抱いているなら、みことばはその信仰に対してこのように答えてくれます。願わくは、皆さん、これらを聞かれて「私は確かに神によって救われた」とその確信をいただいてくださることを心から願います。

このことを考えた時、だから、教会は聖書の真理を正確に教えるという務めをしっかりと果たし続けなければならないのです。この務めこそ、主が教会に、また、牧師や教師たちに命じられた命令です。みことばを伝えるという務めです。どんなに厳しいことであっても、人間的に語りたくないと思うことであっても、主が言われている以上、私たちはそれを語らなければなりません。確かに、今のキリスト教会を見るときに、正しくない福音が広まっていることを知っています。たとえば、繁栄を約束するような福音が語られています。つまり、「イエスを信じたなら何がもらえるのですか？」と、それを先ず聞いてから信じるかどうかを考えると…。イエスを信じたなら健康になるとか、イエスを信じたなら富を得ることができるとか、イエスを信じたなら成功する…。これは聖書が教える信仰ではありません。

なぜなら、聖書は私たちに私たちの罪深さを教えるし、救いに与るためにはその罪をしっかりと認識して心からなる悔い改めが必要であると教えます。しかし、悲しいことにその教会は罪の話もしないし、神の聖さや永遠の地獄について語ることはないのです。

### G. 我はからだのよみがえりを信ず

からだのよみがえりとは救いに与った私たちの希望です。必ず、このからだはよみがえり、そして、主とともに永遠を過ごすということです。聖書が私たちに教えていることは、すべての人のからだはよみがえりということです。イエス・キリストの救いに与っている者たちだけでなく、すべての人たちのからだのよみがえりです。使徒の働き24：15に「義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱えている望みを、神にあって抱いております。」とあります。神の救いを拒んだ罪人も、また、救いをいただいた者も、どちらも永遠に生きるのです。しかし、違うのはその永遠を過ごす場所です。

イエスが弟子たちに語られたことばを見ましょう。マタイ25：31-46です。「：31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。：32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、：33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。：34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。：35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、：36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』：37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。：38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。：39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』：40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』：41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。：42 おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、：43 わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』：44 そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渇き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』：45 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小

さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』:46 こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。」、その日が来るということと言われたのです。

二組に分けられるのです。救いに与った者と、その救いを自らの意志をもって拒んだ者たちのグループに分けられるのです。そして、二つのよみがえりが聖書に記されています。

#### ☆二つのよみがえり

##### 1. 罪の赦しをいただいた者のよみがえり

・義人の復活 : 救いに与った者の復活を「義人の復活」とイエスは話されました。ルカ 14 : 14 「その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」、これはパリサイ派のある指導者の家で食事をなさったときにイエスが言われたことです。

・第一の復活 : また、黙示録 20 : 5には「第一の復活」ということばが出ています。20 : 5、6 「:5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」、

これが救いに与っていた者たちのよみがえりです。

##### 2. 罪の赦しを拒んだ者のよみがえり

ヨハネ 5 : 29に「善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」と書かれています。だから、よみがえって彼らはさばきを受けるのです。つまり、イエスを信じている者たちはよみがえって栄光のからだをいただくのですが、この救いを拒んだ者たちもよみがえって永遠に生きるからだをいただくのです。そして、そのからだをもって彼らは永遠の苦しみを経験するのです。旧約のダニエル書 12 : 2をご覧ください。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」、この「そしり」とは「非難、叱責」という意味があります。「忌み」とは「嫌悪、憎悪」で大変憎まれているのです。

ですから、みことばが教えるように、ある人たちはよみがえって永遠のいのちに至るが、そうでない人たちは神が罪を責められ忌み嫌われるような場所に入ります。しかも、それが「永遠の忌みに」と書かれています。永遠の苦しみであることを私たちに教えています。これがいつ起こるのか？イエスを拒んだ者たちは「大きな白い御座のさばき」（黙示録 20 : 11）によって、すべてのイエスの神の救いを拒んだ者たちはよみがえって来て、そこでさばかれ永遠の地獄へと行くのです。そこで永遠の苦しみに至ります。このダニエルのことばが成就するのです。

#### 整理 =

救いに与った者たちはよみがえって神の前で、その信仰の行いに応じて祝福をいただいて神とともに永遠に生きています。ただ、救いに与った者たちのよみがえりに違いがあります。

#### ☆救いに与った者のよみがえり

##### 1) よみがえりのタイミング

- ・キリストの空中再臨のとき :
- ・キリストの地上再臨のとき : 患難時代を通して来た信仰者がよみがえります。

##### 2) よみがえりのときにいただくもの

・栄光のからだをいただきます。永遠に生きるからだです。I コリント 15 : 44に「血肉のからだでは蔭かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」、また、15 : 53、54 「:53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。:54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」としるされている、みことばが実現します。」とあります。ですから、死ぬことのないからだを与えられるのです。そのからだをいただいた日こそまさに「勝利の日」なのです。やっと私たちはこの罪のからだから解放されるのです。

そして、約束されていた栄光のからだをいただくのです。そのときに私たちは黙示録 21 : 4が教えるように「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、痛みもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」と、こうして新しい栄光のからだをいただき、この天と地は新しくされ、そこで私たちは神とともに永遠を過ごすのです。これがまさに最後のことばにつながっていきます。

#### H. 我はとこしえのいのちを信ず アーメン

私たちは神からすばらしい約束をいただいたのです。必ず、よみがえる、そして、私たちはその後神とともに永遠を過ごすこと。まさに、私たちの永遠の祝福が最後に記されています。私たちは永遠を創造主であり救い主である神とともに過ごすことが赦されたのです。しかも、この神を心から、罪を犯すことなく妨げられることなく礼拝をささげることのできるのです。悲しいことに、今私たちは肉を持って

いる間、この栄光のからだをいただくまでこの地上にあって私たちの礼拝は不完全です。神の前に喜んで礼拝をささげようとしても私たちの礼拝は不完全です。いろんな思いが出て来るし、いろいろなことを考えてしまいます。しかし、栄光のからだをいただいたなら、それらのすべてのものから私たちは解放されるのです。そして、私たちは愛する主を心から礼拝することができるのです。

それこそが私たちにとっての喜びです。そして、これを私たちはどこしえに行い続けることができます。私たちを救ってくださった愛する神を私たちは何の妨げもなく何の罪もなく礼拝し続けることができます。これはすべて神の恵みのゆえであるということを私たちは忘れてはならないのです。

ですから、天にあって私たちは罪から解放されて神を崇めるのですが、この地上にあって私たちは神を崇めながら生きるという、そのような新しい人生を歩み始めたのです。主が成してくださった恵みを覚えるとともに、どんな神を私たちは信じているのか、そのことをしっかり覚えて、このすばらしい特権に与ったことを感謝しながら生きることです。

その意味でも、この使徒信条は大切です。私は何を信じているのか、どんな神を信じたのか、その正しい知識に基づいて私たちはそれにふさわしい神を称え続けていくのです。そして同時に、私たちはこの約束されたすばらしい永遠が訪れることを待ち焦がれながらこの日を生きていくのです。

「使徒信条」、すばらしい信仰の告白です。そして、皆さん、これこそ私たちが信じることです。私たちの「信仰告白」です。それがこの「使徒信条」です。願わくは、皆さんがいつもこの信条を振り返りながら、私は何を信じているのか、そして、どんなにすばらしい約束を神からいただいたのか、そのことを常に思い出しながら地上にあってしっかりこのお方を誉め称えていきましょう。そして、その先には罪のない栄光のからだをもってこの方を称え続ける日が待っています。楽しみに心待ちにしながら、与えられた一日一日をしっかりと歩んでいきましょう。